

# 小川洋子 『密やかな結晶』 研究

— 『アンネの日記』 からの影響を中心に —

江 角 華 子

はじめに

小川洋子作品には、アンネ・フランクやナチス・ドイツを思わせる設定や比喩、エピソードが度々登場する。今回取り扱う『密やかな結晶』もそれらと関係する設定や場面が登場する作品である。それらを元に作品を考察し、より深い読解を試みる。

## 一 小川洋子について

昭和三七（一九六二）・三・三〇）。小説家。岡山県生。昭和五九年早稲田大第一文学部卒。郷里岡山の川崎医大秘書室に勤務後、結婚・退職の頃から本格的な執筆活動に入る。死を連想させる幻想的な静けさを作風とする。『揚羽蝶が壊れる時』で海燕新人賞（昭六三）。『妊娠カレンダー』で芥川賞（平三三）。生家は金光

教の熱心な信徒で、自伝的エッセイに『深き心の底より』（平一一）がある（藤木直実）  
（浅井清・佐藤勝編『日本現代小説大辞典 増補縮刷版』）

## 二 作者の『アンネの日記』に対する思い

小川は一九九四年七月にアンネの生家や隠れ家、アウシュヴィッツ、アンネと関わりのある人物を訪ねる旅をし、それを元に、『アンネ・フランクの記憶』を著した。その中で、

なぜ書くことにこれほどの救いを感じるのか、自分でも知りたくなってきた。

改めて、じっくり考えてみて行き着いたのが、『アンネの日記』だった。わたしが一番最初に言

葉で自分を表現したのは、日記だった。その方法を教えてくれたのが『アンネの日記』なのだ。

(小川洋子『アンネ・フランクの記憶』一一頁)と述べている。

小川は、「言葉とはこれほど自由自在に人の内面を表現してくれるものなのか(同前一―一二頁)と驚き、自分の中にも書きたいという欲求があることに気付く。アンネを真似してつけ始めた日記帳がやがて小説へと繋がっていったと語っており、『アンネの日記』が小川の作家としての原点であることが分かる。

### 三 小川洋子『密やかな結晶』考察

#### ○梗概

「わたし」が幼い頃、「消滅」の起きない人間だった母親は、「秘密警察」に連れ去られ殺されてしまう。父親と「ばあやさん」も亡くなった今、家族のような存在は「ばあやさん」の夫である「おじいさん」だけである。あるとき、小説家である「わたし」の担当者「R氏」から、自分は「消滅」の起きない人間であることを告白される。そこで「わたし」は「おじいさん」と協力して、「R氏」を隠し部屋に匿うことに決める。やがて小説も「消滅」してしまうが、「わたし」はなんと最後まで書き終える。身体の「消滅」も始まり、最

後には「わたし」の身体は全て「消滅」してしまう。

#### ○設定

「消滅」と呼ばれる現象が起きる、ある島での物語。実際に目の前から消えるという意味の消滅ではなく、それに関する記憶を失ってしまうことを人々は「消滅」と呼んでいる。そのため、「消滅」が起きたものを思い出すのは困難となる。

「秘密警察」という「消滅」を徹底させる組織があり、「消滅」したものが残っていないかを搜索する。これの人々は「記憶狩り」と呼ぶ。「消滅」したものを処分せずに持ち続けていると「秘密警察」に罰せられるおそれがある。そのため、「消滅」が起ると、人々は速やかに「消滅」が起きたものの処分に取り掛かる。「消滅」が起きる人間と、「消滅」が起きない人間があり、後者は「秘密警察」に捕えられてしまう。

島の外へ出る唯一の手段だった船も「消滅」してしまったため、人々は島の外に出ることもできない。

#### ○『密やかな結晶』執筆の動機

『密やかな結晶』は小川にとって初の書下ろし長篇小説である。小川がアンネの足跡をたどった旅について書いた『アンネ・フランクの記憶』よりも前の作品

となる。

小川はエッセイ『深き心の底より』の中で、

病気か何かで自分が言葉を失ってしまったら、あるいは世界のあり方が変わって小説が抹殺されてしまったら、と考えると怖くてたまらない。無価値の宣告を受けた私の本が、どこら見知らぬ町の広場で炎の中に放り込まれてゆく。一冊、また一冊と落ちてゆくたび、炎は一層大きくなる。

——そんな想像に繰り返し襲われるのだ。

ある日とうとう怖さがつのり、我慢できなくなって、この世から本がすべて消え去ってゆくというストーリーの物語を書いた。それを書いている間、内容とは裏腹に、自分のすぐ手の届く場所に小説があると感ずることができた。小説を失う恐怖は、小説を書くことでしか紛らすことができな

ない。(小川洋子『深き心の底より』八八頁)

と述べており、その物語が『密やかな結晶』であると考えられる。

また、『ユリイカ』の小川洋子特集内のインタビューにおいて、『密やかな結晶』執筆時に念頭にあった作品として、ポール・オースターの『最後の物たちの国で』や筒井康隆の『残像に口紅を』、リチャード・ブローティガンの『西瓜糖の日々』、レイ・ブラッドベリの『華

氏451度』などを挙げており、『密やかな結晶』の設定や場面においてそれらの影響が見られる。

『最後の物たちの国で』は、物が次々となくなっていく世界へ兄を探しに行った主人公アンナからの手紙という形式をとっている。記憶もなくなっていくという設定は『密やかな結晶』と類似した点である。『最後の物たちの国で』は、現代に実際に起きたことを下敷きにししていると推測され、アンナがユダヤ人である設定から、アンナ (Anna) とはアンネ (Anne) を踏まえていると考えられる。この作品を通して小川がアンネに触れているということになる。アンナは手紙によって国の現状を伝えようとしており、書くという行為が記憶を誰かに伝えようとする重要な行為となっている。

筒井康隆の『残像に口紅を』は、世界から文字が消えていき、その文字を含む言葉も世界から消えていくという設定であり、リチャード・ブローティガンの『西瓜糖の日々』では、「忘れられた世界」という場所があり、「忘れられた物」を見ても人々はそれが何なのか理解することができないという場面がある。記憶の消滅という設定が『密やかな結晶』と共通している。

レイ・ブラッドベリの『華氏451度』は本が禁止された世界であり、本が燃やされる場面がある。『密や

かな結晶』内でも、大量の本が燃やされる場面が描かれる。『華氏451度』において、物語を守ろうとする人々は、物語を記憶することで保存を試みているが、『密やかな結晶』では記憶そのものの抹消を描いていると言えよう。

このように、『密やかな結晶』の設定にこれらの作品からの影響があることが分かる。また、小川が、消滅や記憶といった題材や、書くという行為について関心があることも確認される。

○アンネ・フランク及びナチス・ドイツと『密やかな結晶』との関連

以下に、本作においてアンネ及びナチス・ドイツを彷彿とさせる設定や場面を指摘し、『密やかな結晶』とアンネ及びナチス・ドイツとの関係について四つの観点より考察する。

支援者としての「わたし」

#### 【第一の指摘】

「わたし」が「秘密警察」に追われる「R氏」を隠し部屋で匿う姿は、ゲシュタポに追われるアンネたちの隠れ家生活を支援した人々の姿であると言えよう。隠れ家生活の支援者たちの一人であるミープ・ヒー

スは『思い出のアンネ・フランク』を著し、支援者から見た隠れ家の内側と外側の様子を語っている。その中で、ミープがアンネの父オットーから隠れ家生活の支援を頼まれたときに、「もちろんですわ」と即答する場面がある。小川はこの場面を「あそこは最も心に残る場面の一つでした。」（小川洋子『アンネ・フランクの記憶』一三〇頁）と述べ、ミープを始めとする支援者たちが、自分の命が危うくなるにも関わらず、他人のために行動する姿に感銘を受けている。

『密やかな結晶』の「わたし」も、「R氏」を助けるために勇氣ある行動を起こした人物として描かれている。

#### 【第二の指摘】

「R氏」に、隠し部屋まで来てもらうとき、土砂降りの雨だったという場面は、フランク一家が隠れ家まで移動する日も土砂降りの雨だったことから着想を得たのだと考えられる。

アンネの姉マルゴは軍から出頭命令が出ていたため、フランク一家の誰よりも先に、隠れ家へ移る必要があった。そのときの実際の様子が、ミープ・ヒース著『思い出のアンネ・フランク』に書かれている。マルゴは、当時ユダヤ人は使用を禁止されていた自転

車に乗っていたが、土砂降りの雨のおかげで警察に見つかることなく無事隠れ家まで移動することができたのである。

『密やかな結晶』でも、「R氏」を隠し部屋のある家まで誘導した日は土砂降りの雨だった。無事移動できた後、誘導役だった「おじいさん」は「何もかも雨が覆い隠してくれました」（小川洋子『密やかな結晶』一〇頁）と言うが、ミープがフランク一家を安心させるために言った「この雨が目隠しになってくれるでしょう」（ミープ・ヒース『思い出のアンネ・フランク』一三一頁）という言葉と重なり合う。土砂降りの雨という設定が事実に基づいた設定であることが分かる。

### 【第三の指摘】

カレンダーが「消滅」した影響か冬が終わらなくなり、食糧が乏しくなってしまったため、「わたし」は何時間も並び、複数の店を回って食糧を調達している。これも、隠れ家で生活する八人のために食糧を調達する支援者の姿と重なる。

配給制だったため、支援者たちは隠れ家の八人分の配給切符を闇ルートで手にいれなければならなかった。ユダヤ人でなくても、食糧が十分に手に入らない状況であったため、複数の店を回り、何時間もかけて

買い物をしなければならなかった。

食糧を手に入れる苦勞、他人の命を支える苦勞が共通して描かれている。

### 【第四の指摘】

食糧が乏しい中、「わたし」はわずかな材料を使ってケーキを作り、隠し部屋で「R氏」と共に「おじいさん」の誕生日を祝い、プレゼントを贈っている。この場面は、祝いの日に、ミープが配給制によって割当量の減少しているバターなど、貴重な材料を使ってケーキを焼き隠れ家に届けたことや、隠れ家の住人同士でプレゼントを贈り合ったというエピソードと関係している。

窮屈で重苦しい空気が漂う隠れ家生活に少しでも変化を付けようと、支援者たちは、さまざまなことを行っている。食糧だけでなく、煙草や本、通信講座の教材などを持ち込んだり、外の情報を伝えたりしている。ミープがケーキを作ったこと、また、隠れ家の住人同士でプレゼントを贈り合ったことも隠れ家生活に変化をもたらし、お互いを励ますものとなった。『アンネの日記』にも、支援者の人々が精神的な支えになってくれていることが書かれている。

『密やかな結晶』でも、「わたし」は「R氏」を氣遣い、

気分を入れ替えられるようなことや、集中できるような仕事をもち込んでいた。

### ○「わたし」の書く小説について

「わたし」は小説家であり、四冊目の本の執筆に取り組んでいる。その物語とは、主人公が恋人（タイプライター教師）によって、声をタイプライターに封印され、壊れたタイプライターが山積みにされた時計塔の一室に閉じ込められ、やがて声だけでなく身体も消えてしまうという物語である。

この物語について、和田勉氏は「小川洋子論」において、以下のように論じている。

なお、『密やかな結晶』の主人公が今書いている小説の中では、タイプライターの教師は、恋人であるヒロインを含めた生徒たちの身心を自己の思うままに操っていると思いつ込んでいる。これは統制された状況に生きる主人公のバリエーションとして表されており、入れ子型構造となっている。

#### （傍線引用者）

稿者はこの考えに同意するが、「わたし」の書く小説の主人公は、言葉を伝える手段までも奪われていたことに注目したい。

『密やかな結晶』の「わたし」は、小説は「消滅」

しても書くという手段は奪われなかった。

一方、小説の中の主人公は、声だけでなく会話に使っていたタイプライターまでも恋人に奪われてしまい、やがて「感触も意志も言葉にすることができな」（小川洋子『密やかな結晶』二五〇頁）い状態となり、抵抗する意志もなくなってしまう。

どちらも「統制された状況に生き」ているが、「わたし」の書いた小説では、自分を表現する手段までもが奪われたらどうなるかということを描いているのである。「統制された状況」でも、『密やかな結晶』の「わたし」は、書くことでその状況に抗っているのである。

### ○「わたし」にとっての小説——『アンネの日記』との関係

小説が「消滅」してしまった後も、「わたし」は小説を書き続けようとする。「消滅」が起きた物事を行うのは困難なことであり、「わたし」は、自分でも物語を書いているのかどうか分からないまま、一文ずつ書き進めていく。

そして、「最後の時が、訪れたのです。」（同前四〇二頁）という一文によって、「わたし」の書いていた小説は締めくくられる。

身体は「消滅」も進んでいる中、「わたし」は小説を

最後まで書ききった。そして「R氏」と以下のような会話をしている。

「わたしが消えたあとでも、物語は残るかしら」

「当たり前じゃないか。君が書きつけた言葉は、その一つ一つが記憶として存在してゆくんだ。僕の消えない心の中でね。だから安心していいんだよ」

「よかったわ。何か一つでも、自分がこの島に存在していた痕跡を残すことができて」(同前四〇五頁)(傍線引用者)

「存在していた痕跡を残すことができ」たとは、小説という形で、「わたし」が「R氏」の記憶の中で永遠に生き続けられるということを意味している。

アンネは、一九四四年四月五日の日記で、将来、書く仕事に就きたいということを書き、「わたしの望みは、死んでもからもなお生き続けること！」(アンネ・フランク『アンネの日記 増補新訂版』四三一—四三二頁)という言葉を残している。このアンネの言葉と「よかったわ。何か一つでも、自分がこの島に存在していた痕跡を残すことができて」という言葉は共鳴し合っている。

自分がこの世からいなくなっても、何らかの形で誰かの記憶の中で生き続けたい、生きた証を残したいと

いう「わたし」の願いは、「消滅」してゆく「わたし」が「書きつけた言葉」へと「結晶」していったのである。本作のタイトルとなっている『密やかな結晶』という表現が内包するものがそこに認められるのではないだろうか。

#### ○小川作品における「消滅」のモチーフ

小川作品には『密やかな結晶』以外にも、「何かが消えていく」、あるいは「本来あるべきものがない」など、「消滅」のモチーフが度々描かれる。

小川は、『物語の役割』において、小説を書く過程について、まず場所を定め、そこから人物の姿を作り上げていくと述べている。

そこは廃墟になっていて、その廃墟の中に隠れているいろいろな記憶のかけらをつなぎ合わせて、一つの情景、映像を思い浮かべていきます。私は、自分の小説の中に登場してくる人物たちは皆死者だなど感じています。すでに死んだ人々です。だから、小説を書いていると死んだ人と会話しているような気持ちになります。(小川洋子『物語の役割』六七—六八頁)

また、自身の作家としての姿勢を次のように述べている。

先を歩いている人たちが、人知れず落としていったもの、こぼれ落ちたもの、そんなものを拾い集めて、落とした本人さえ、そんなものを自分が持っていたと気づいていないような落とし物を拾い集めて、でもそれが確かにこの世に存在したんだという印を残すために小説の形にしている。そういう気がします。(同前七五頁)(傍線引用者)

私はただ誰かが落としていった記憶のかけらを拾い集めて、その人が言葉にできなかったことを、たまたま自分に言葉という手段があったから小説にしただけです。(同前八一頁)(傍線引用者)

小川の創作方法は、まず廃墟になっている場所というイメージから始まり、そこにかつていた人物(「死者」・「先を歩いている人たち」)の記憶を想像して言葉にしていくという方法である。今はもう消えてしまっているものを想像することから創作が始まっている。すでに消えてしまったものの中に、小説家が書かなければ完全に消えてしまう記憶があり、それを「確かにこの世に存在したんだという印を残すために」小説家は「小説の形にしている」のである。このような創作方法であるため「消滅」というモチーフに惹かれるのではないだろうか。

このように『密やかな結晶』において、書くという

営みは、消えていく記憶を何らかの形で残す手段となっており、小川自身にとつても小説を書く意味を確かめるものとなったと考えられる。

#### おわりに

ナチスの時代というコンテクストに照らししてみると、「わたし」は「秘密警察」によって追われる者の支援者であり、同時に自らが書き残した言葉として生き続けたいと願ったアンネ(追われる者)の姿とも重なり合う。

本作『密やかな結晶』は、小川が作家としての自らの原点、自分にとって言葉を書き綴ることの根源と向き合おうとした小説と言えるだろう。

#### 参考文献

- ・小川洋子『密やかな結晶』(一九九四年、講談社)
- ・小川洋子『アンネ・フランクの記憶』(一九九五年、KADOKAWA)
- ※引用は文庫版(一九九八年、KADOKAWA)のもの
- ・小川洋子『深き心の底より』(一九九九年、海竜社)
- ※引用は文庫版(二〇〇六年、PHP研究所)のもの
- ・小川洋子『物語の役割』(二〇〇七年、筑摩書房)

- ・浅井清・佐藤勝編『日本現代小説大辞典 増補縮刷版』  
(二〇〇九年、明治書院)
- ・アンネ・フランク『アンネの日記 増補新訂版』深町眞理子訳(二〇〇三年、文藝春秋)
- ・郡淳一郎編『ユリイカ二月号 第三六卷第二号』(二〇〇四年、青土社)
- ・筒井康隆『残像に口紅を』(一九九五年、中央公論新社)
- ・ポール・オースター『最後の物たちの国で』柴田元幸訳(一九九九年、白水社)
- ・ミープ・ヒース『思い出のアンネ・フランク』深町眞理子訳(一九八七年、文藝春秋)
- ・リチャード・ブローティガン「西瓜糖の日々」藤本和子訳『世界文学全集 第二五卷』(一九八九年、河出書房新社)
- ・レイ・ブラッドベリ『華氏451度』伊藤典夫訳(二〇一四年、早川書房)
- ・和田勉「小川洋子論」『九州産業大学国際文化学部紀要 第三九号』(二〇〇八年)